信州大学所蔵石井鶴三コレクション――版木に関わる調査報告

小　野　文　子　　（信州大学教育学部）

石井鶴三（1887 － 1973）は、挿絵や版画、油彩画や水彩画など、幅広い分野で活躍した彫刻家である。特に版画については、創作版画の黎明期である明治 30 年代終わり頃から、鶴三晩年の昭和 46（1971）年までの長きに渡り、生涯を通して制作を続けた。昭和 16（1941）年には日本版画協会の会長を、昭和 45（1970）年からは社団法人日本版画協会の理事を務めたことからも、石井鶴三が版画制作に力を注いでいたことが分かる。

信州大学に寄贈された石井鶴三コレクションの中で、現在 77 枚の版木が確認されていることから、今年度の調査ではこれら 77 点を撮影し、『石井鶴三版画集』[1] を頼りにタイトルや制作年を特定した（表 1）。

『石井鶴三版画集』の図版目録では、大正 5（1916）年に制作された《雷鳥》から、鶴三が亡くなる 2 年前の昭和 46（1971）年に制作された《地天泰》までの 157 点が収録されている。しかし、明治 38（1905）年の『平坦』[2] 第 1 号には、イギリスの版画家ニコルソン画の作品を鶴三が模写し、久保井市太郎が彫りを担当した多色木版の《猫》[3]、同誌第 3 号には 2 色木版の《虎》が掲載されている[4]。また、兄の石井柏亭（1882 － 1958）、山本鼎（1882 － 1946）や森田恒友（1881 － 1933）によって創刊された美術文芸雑誌『方寸』にも作品を掲載したりしている[5]。この他、明治期から第二次世界大戦終了までの間に鶴三が発表した作品について、加治幸子による『創作版画の系譜　総目次及び作品図版　1905 － 1944』を頼りに調べてみると、『平坦』や『方寸』だけでなく、『版画（小泉編）』、『詩と版画（旭編）』、『HANGA』、『版画 CLUB』、『白と黒　[第一次]』、『きつつき』、『版芸術』、『エッチング』、『日本版画協会々報』等で作品を発表したり、寄稿したりしていることが分かる[6]（表 2）。『平坦』と『方寸』は美術文芸雑誌、そしてその他は版画を専門とした雑誌である。戦後も鶴三の版画制作は続き、日本版画協会展、春陽会展などに出品し、版画制作への意欲は途絶えることがなかった。従って、実際に制作した作品数は 157 点を超えるものと考えられる。

山本鼎が『平坦』第 1 号に「西洋木版に就いて」を寄稿していることからも分かるように[7]、鶴三が版画制作を始めた明治 30 年代後半には、西洋からの影響により版画を美術作品としてとらえ、絵画や彫刻に並ぶ一つのジャンルとして確立させようという動きが起こった。版画はもともと複数生産を前提としており、複製手段や、情報伝達の手段として用いられていた。浮世絵版画も絵師が版下絵を描き、版木屋のもとで彫師が版木を彫り、彫り上がった版木は摺師のもとで摺りあげられるという、絵師、彫師、摺師がそれぞれの仕事を役割分担した完全な職人の分業の世界であった。明治後半になると、西欧からの技術の流入により写真や石版のような印刷機器を用いる工業的な印刷が発達した。分業によって成り立つ職人の手になる木版、つまり浮世絵のような板目木版による版画は急速に衰退した。しかし一方で、版画の独自性に美を見出し、美術作品としての版画という新しいジャンルが生まれた。複製のためではなく、「版」による表現を重視し、版独自の特質や魅力を生かして制作する版画が誕生するので

ある。

鶴三が版画制作を始めた明治 38（1905）年は、山本鼎が近代日本における版画の出発点となった《漁夫》を『明星』に発表した翌年である。この作品は、山本鼎が千葉の銚子を訪れた際に描いたスケッチがもとに制作されたものであり、石井柏亭がその号に「友人山本鼎君木口彫刻と絵画の素養とを以て画家的木版を作る。刀は乃ち筆なり。」と評し、「刀画」としたように[8]、筆と同等に彫刻刀の創造性を評価し、版画は絵画と同様の価値をもっているという、近代芸術の思潮を含んだもっとも早い作品であった。柏亭の弟である鶴三もまた、「刀画」として『平坦』に作品を掲載している。鶴三は、父が亡くなった翌年、明治 31（1898）年に父方の叔母宅に養子に出されるが、明治 37（1904）年には石井家に戻っており、このとき兄の石井柏亭の友人であった山本鼎は石井家に同居していた。従って、石井柏亭や山本鼎とともに、「刀画」としての版画についての考え方を共有し、鶴三が創作版画運動の最初期の段階から関わっていたことが分かる。後年鶴三は山本鼎について、「わが国に於いて西洋木版を版画創作に活用した最初の人は山本鼎であろう。…中略…　既得の木版技術を作画に活かして、よき版画を創ったのであるが、…中略…　わが現代版画の恩人として山本鼎の功績は没すべからざるものがある」[9]とその功績を評価している。

昭和 27（1952）年の『芸術新潮』に掲載された「版画談義」によると[10]、創作版画の先駆者の一人である恩地孝四郎（1891 － 1955）は、複製版画は版画ではなく、版画とは創作版画のことであり、従って浮世絵版画は版画ではないととしたという。しかし、この点について鶴三は、近代に入り西洋から技術が流入したことで、機械を用いた新式の製版印刷技術が導入されて木版画は衰退するが、そもそも錦絵に版画性を見出し、版画性を生かした作画を試みたことが、現代版画の母体となったと述べている。そして、「版画は版の性能を生かして創作された絵画を云うのである。…中略…　決して既成の絵画を版の過程を経て再生しむるのではない」とし、複製版画と区別して、「純粋版画」と呼び、この純粋版画がすなわち「創作版画」であると述べている[11]。

明治期後半における機械導入による印刷術の急速な進歩とは裏腹に、手仕事を通じた美術作品としての版画が生まれた。『方寸』1 巻 2 号の「方寸言」に「我々は水彩画パステル画の不適当なる複製に木版師を困らせるの愚を敢えてしない。我々は却って日本木版の特徴を助長する筈である。」と記されているように[12]、創作版画は若い芸術家たちが日本の伝統の中に新しいものを見出し創造した新しいジャンルとしての版画の誕生であった。同じく「方寸言」に記された「我々の感情は彫刀に伝はつて木版を刻むのである。」という言葉に、若い芸術家たちの新しい芸術創作への情熱と意欲が感じられる[13]。

200 年以上に渡る鎖国の後、1858 年に開国すると、日本は西洋の文明、文化から大きな影響を受けた。政治体制や生活習慣だけでなく、美術の分野においても、絵画、彫刻、建築などが西洋から流入した。大きな変化の中で、日本の伝統が失われつつも、その中に新たな方向性を見出したものの一つに、「版画」の誕生があった。このような時代に、石井鶴三は創作版画の誕生に立会い、明治 38（1905）年『平坦』に作品を発表してから、最後の作品発表となる昭和 46（1971）年までの 66 年間、半世紀以上に渡って版画の制作を続けた。すでに述べたとおり、現時点では信州大学の石井鶴三コレクションの中に 77 枚の版木が確認されているが、未整理の収蔵品の中から版木が出てくる可能性は高い。鶴三の手に

なる版木は、近代から戦後にかけての版画の発展やその変遷の一端を明らかにする手がかりとなる貴重な資料といえる。新しい版画制作の動きは、同人誌を発行して活動の基盤としたため、明治後半から日本全国で多くの版画雑誌が出版された。現在ではほとんど入手困難なものも数多くあるが、丁寧に資料を収集し、吟味していくことで、石井鶴三の版画家としての位置づけを明らかにして行くことが今後の課題と言える。

謝辞

版木および図版撮影については、信州大学教育学部の蛭田直先生にご協力いただいた。厚くお礼申し上げる。

---

[1] 岩部定男、越野志津男編『石井鶴三版画集』形象社、1978 年。

[2] 第 1 号（明治 38[1905] 年 9 月）～第 5 号（明治 39[1906] 年 4 月）。

[3] 『平坦』明治 38（1905）年 1 号。

[4] 石井鶴三《虎》2 色木版、『平坦』1 号、明治 38（1905）年 11 月 25 日。

[5] 石井鶴三《田舎道》ジンク版、『方寸』 2 巻 1 号、明治 41（1908）年 1 月 13 日。

[6] 創作版画誌については、加治幸子編著『捜索版画誌の系譜　総目次及び作品図版　1905 － 1944』中央公論美術出版、2008 年を参考にした。石井鶴三が作品を発表した版画雑誌の発行期間等は次の通りである。『方寸』：1 巻 1 号～ 5 巻 3 号（明治 40[1907] 年 5 月～明治 44[1911] 年 7 月）、『版画（小泉編）』：1 巻 1 号～ 3 号（大正 10[1921] 年 11 月～大正 11[1912] 年 4 月）、『詩と版画（旭編）』：1 輯～ 13 輯（大正 11[1922] 年 9 月～大正 14[1925] 年 8 月）、『HANGA』：1 輯～ 16 輯（大正 13[1924] 年 2 月～昭和 5[1930] 年 4 月、『版画 CLUB』：1 年 1 号～ 4 年 3 号（昭和 4[1929] 年 4 月～昭和 7[1932] 年 3 月）、『白と黒　[第一次]』：創刊号～ 50 号（昭和 5[1930] 年 2 月～昭和 9[1934] 年 8 月）、『きつつき』：創刊号～ 3 号（昭和 5[1930] 年 7 月～昭和 6[1931] 年 6 月）、『版芸術』：1 号～ 58 号（昭和 7[1932] 年 4 月～昭和 11[1936] 年 12 月）、『エッチング』：1 号～ 125 号（昭和 7[1932] 年 11 月～昭和 18[1943] 年 6 月）、『日本版画協会々報』：1 号～ 39 号（昭和 8[1933] 年 3 月～昭和 19[1944]6 月。昭和 21[1946] 年に復刊。）

[7] 森登編・解題「『平坦』目録及び解題」『神奈川県立近代美術館年報』1994 年。

[8] 柏亭生「パレット日記」『明星』1904（明治 37）年 7 月、pp.92。

[9] 石井鶴三「版画談義」『芸術新潮』vol.3no.5、1952 年、p.72。

[10] 石井鶴三「版画談義」、p.70 & p.72。

[11] 同上、p.70。

[12] 「方寸言」『方寸』1 巻 2 号、明治 40（1907）年 6 月 17 日、p.2。

[13] 同上、p.2。

表１：信州大学所蔵　石井鶴三版木コレクション

信州大学所蔵番号	Cat. No.	タイトル	制作年	サイズ	備考
版１－８	2	雷鳥	大正５（1916）年	155 × 227	
版１－９	2	雷鳥	大正５（1916）年	155 × 227	
版１－２０	3	巳（蛇）	大正６（1917）年	89 × 109	
版１－２０	3	巳（蛇）	大正６（1917）年	138 × 90	
版１－17	4	巳（蛇）	大正６（1917）年	128 × 81	
版１－２１	5	午（馬）	大正７（1918）年	139 × 90	
版１－24	6	雪国	大正８（1919）年	130 × 112	・第一回日本創作版画協会展
版１－25	6	雪国	大正８（1919）年	134 × 89	
版１－25	6	雪国	大正８（1919）年	134 × 89	
版１－26	6	雪国	大正８（1919）年	153 × 98	
版１－26	6	雪国	大正８（1919）年	153 × 98	
版１－16	20	未（羊）	大正８（1919）年	86 × 105	
版２－１	21	未（羊）	大正８（1919）年	160 × 86	・大正八年年賀状
版１－16	22	申（猿）	大正９（1920）年	108 × 86	
版２－９	22	賀正　大正九年	大正９（1920）年	74 × 40	・《申（猿）》の文字部分
版２－１	23	酉（鳥）	大正 10（1921）年	160 × 86	・大正十年年賀状
版３－23	25	子供の図	大正 11（1922）年	236 × 330	・第四回日本創作版画協会展
版３－28	26	湖上	大正 11（1922）年	232 × 332	・第四回日本創作版画協会展 ・『版画（小泉編）』、第１巻３号、大正 11（1922）年４月 20 日
版３－29	26	湖上	大正 11（1922）年	237 × 330	・第四回日本創作版画協会展
版３－29	26	湖上	大正 11（1922）年	237 × 330	
版３－26	27	窟の湯	大正 11（1922）年	234 × 330	・第四回日本創作版画協会展
版３－27	28	窟の湯	大正 11（1922）年	330 × 235	・第四回日本創作版画協会展
版３－32	31	婦人	大正 12（1923）年	232 × 331	・第五回日本創作版画協会展
版２－３	35	山	大正 13（1924）年	122 × 118	・『詩と版画』（旭編）、第８輯、大正 13（1924）年 11 月 25 日
版２－３				122 × 118	・（『日本アルプス）久縦走記』（大正 12）年７月８日石井鶴三氏自画自刻
版１－11	左：36 右：37	左:花（『日本アルプス縦走記』扉絵） 右：子（鼠）	左：大正 12（1923）年 右：大正 23（1924）年	155 × 226	
版３－11	43	高原	大正 13（1924）年	239 × 331	・第三回日本創作版画協会展（参考作品）
版３－30	43	高原	大正 13（1924）年	237 × 331	・第三回日本創作版画協会展（参考作品）
版３－32	43			232 × 331	Cat.No.43 関連
版１－６	45	兎	昭和初期	234 × 154	
版３－30	50	びなんかつら	昭和２（1927）年	237 × 331	・第七回日本創作版画協会展
版２－10	51	犬	昭和２（1927）年	233 × 333	・第七回日本創作版画協会展
版３－40	57	温泉（部分）	昭和３（1926）年	239 × 334	・第八回日本創作版画協会展
版１－４	61	みみずく	昭和４（1929）年	230 × 155	・『藝術寫眞研究』昭和４年表紙 ・『きつつき』第３号、昭和６（1931）年６月 28 日掲載
版１－14	右：62 左：82	左：猫 右：厳頭海波	左・右：昭和５年	160 × 240	・左：『藝術寫眞研究』昭和５年表紙 ・右：「賀正昭和壬申」はカタログ 62 にはなし ・《厳頭海波》は《鷺》として『白と黒』[第一次] 第 21 号、昭和７（1932）年２月１日に掲載
版３－40	64	羊歯	昭和６（1931）年	239 × 334	・第一回日本版画協会展　　・シカゴ美術館初期創作版画展・『版画 CLUB』、第３年第３号、昭和６（1931）年 10 月 10 日掲載
版２－４	67	群羊	昭和６（1931）年	192 × 120	・『藝術寫眞研究』昭和６年表紙
版３－24	69	群猿	昭和７（1932）年	238 × 331	・『藝術寫眞研究』昭和８年表紙
版３－25	70	水泳	昭和７（1932）年	238 × 331	・第二回日本創作版画協会展
版３－25	70				・no. 70 関連
版３－９	77	雨中競走	昭和 11（1936）年	290 × 400	・第５回日本版画協会展
版３－９	77	雨中競走	昭和 11（1936）年	290 × 400	
版３－10	77	雨中競走	昭和 11（1936）年	238 × 338	
版３－11	77	雨中競走	昭和 11（1936）年	239 × 331	
版１－５	80	痩せ猫	昭和 13（1938）年	226 × 156	・装丁のための版画・『版画 CLUB』第１年第３号、昭和４(1929) 年５月 21 日掲載
版３－10	80	痩せ猫（部分）	昭和 13（1938）年	238 × 338	
版３－31	80	『やせ猫』題字	昭和 13（1938）年	236 × 330	
版２－２	82	猫	昭和５（1930）年	120 × 125	・『藝術寫眞研究』昭和５年表紙・『白と黒』[第一次] 第 20 号、昭和７（1932）年１月１日掲載
版１－３	84	少女二人	昭和 14（1939）年	158 × 234	・『藝術寫眞研究』昭和 14 年表紙
版３－17	86	江南風物	昭和 15（1940）年	246 × 343	
版３－23	88	馬小屋	昭和 15(1940）年	236 × 330	
版３－36	91	炉辺清談	昭和 16（1941）年	333 × 252	・第四回日本版画協会展
版３－36	91	炉辺清談	昭和 16（1941）年	333 × 252	・Cat.No.91 関連
版１－13	92	勝力士	昭和 17（1942）年	23 × 155	・第 11 回日本版画協会展
版１－６	93	百子榴	昭和 18（1943）	234 × 154	・第 12 回日本版画協会展『藝術寫眞研究』昭和 11 年表紙

信州大学所蔵番号	Cat. No.	タイトル	制作年	サイズ	備考
版３－39	94	獅子舞	昭和 18（1943）年	251 × 333	・第十二回日本版画協会展
版３－39	95	犬	昭和 18（1943）年	251 × 333	
版３－21	96	柴負	昭和 20（1945）年	270 × 350	・第十四回日本版画協会展『光』昭和 20 年表紙
版３－22	102	雨	昭和 21（1946）年	333 × 251	
版３－33	106	緑陰飲馬	昭和 21（1946）年	226 × 303	
版３－22	106		おそらく昭和 21（1946）年	333 × 251	・Cat.No.106 関連
版３－20	107	『千里行』カヴァー	昭和 21（1946）年	270 × 350	・装丁カヴァー（萩原井泉水著『千里行』光文社刊）
版３－18	107	『千里行』	昭和 21（1946）年	270 × 350	・装丁文字（萩原井泉水著『千里行』光文社刊）
版３－19	左：109 右：108	左：『千里行』扉右：『千里行』表紙	昭和 21（1946）年	270 × 350	・装丁扉及び表紙（萩原井泉水著『千里行』光文社刊）
版３－33	110	海辺梳髪	昭和 23（1948）年	303 × 226	・Cat.No. 110 関連
版３－37	112	雷	昭和 27（1952）年	353 × 267	
版３－38	113	風	昭和 27（1952）年	333 × 252	・第二十回日本版画協会展
版１－18	114	辰（龍）	昭和 27（1952）年	142 × 90	・龍賀正昭和壬辰
版３－16	117	雷	昭和 28（1953）年	350 × 267	・第二十一回日本版画協会展
版１－23	119	羊	昭和 42（1967）年	119 × 121	・『藝術寫眞研究』昭和 42 年表紙
版１－23	127	雉	昭和 32（1957）年	155 × 142	
版３－７	128	追羽子	昭和 32（1957）年	310 × 413	・第 25 回日本版画協会展
版１－７	130	水牛	昭和 34（1959）年	183 × 137	・『藝術寫眞研究』昭和 36 年表紙
版１－10	131	嶐山	昭和 34(1959) 年	250 × 345	・第 27 回日本版画協会展
版３－35	132	浅間鬼	昭和 35（1960）年	246 × 342	・第二回東京国際版画ビエンナーレ展（国内招待）
版３－７	133	相撲	昭和 35（1960）年	310 × 413	・第二回東京国際版画ビエンナーレ展（国内招待）
版３－８	134	大同石仏	昭和 35（1960）年	420 × 320	・第二回東京国際版画ビエンナーレ展（国内招待）
版３－８	134	大同石仏	昭和 35（1960）年	420 × 320	
版１－10	137	虎つかい	昭和 37（1962）年	250 × 345	・藝術寫眞研究昭和 37 年表紙
版２－７	138	雲龍	昭和 39（1964）年	184 × 140	・『藝術寫眞研究』昭和 39 年表紙
版２－５	139	馬と少年（一）	昭和 39（1964）年	145 × 185	・第 41 回春陽会展・『藝術寫眞研究』昭和 41 年表紙
版２－11	140	馬と少年（二）	昭和 40（1965）年	343 × 246	・第 42 回春陽会展
版３－35	141	風雷	昭和 42（1967）年	246 × 342	・第 44 回春陽会展
版２－８	142	ほしがらす	昭和 42（1967）年	184 × 140	・『藝術寫眞研究』昭和 43 年表紙
版３－６	143&144	ひれふるやま	昭和 43（1968）年	418 × 322	・Cat.No.144 は第 36 回日本版画協会展
版３－６	144	ひれふるやま	昭和 43（1968）年	418 × 322	・第 36 回日本版画協会展
版３－４	146	みづのえうらしまのこ	昭和 43（1968）年	413 × 326	
版３－３	147	やくもたつ	昭和 44（1969）年	413 × 326	・第 46 回春陽会展
版３－３	148	のみのすくねとたぎまのくゑはや	昭和 44（1969）年	413 × 326	・第 37 回日本版画協会展
版１－22	149	酉（軍鶏）	昭和 44（1969）年	149 × 94	
版３－４	150	いへきかな	昭和 45（1970）年	413 × 326	・第 47 回春陽会展
版３－５	150	いへきかな（部分）	昭和 45（1970）年	431 × 330	・第 47 回春陽会展
版３－17	151	山精	昭和 45（1970）年	246 × 343	・「森の男」の書き込み
版３－１	154	第 38 回版画展	昭和 45（1970）年	4377 × 300	・第 38 回版画展ポスター
版３－１	154	第 38 回版画展	昭和 45（1970）年	4377 × 300	
版２－６	155	戌（犬）	昭和 45（1970）年	185 × 138	
版２－６	156	亥（猪）	昭和 46（1971）年	185 × 138	
版１－15	157	地天泰	昭和 46（1971）年	240 × 160	・第 48 回春陽会
版１－12	なし		昭和 5（1930）年	156 × 227	・賀正　昭和庚午　（昭和 5 年）
版１－19	なし	日本美術院彫刻展（チケット）	昭和 25 年	154 × 90	・日本美術院　彫刻展　十二月廿三日ー廿九日　日本橋三越
版３－38	なし	相撲	昭和 30（1955）年	333 × 252	
版１－９	なし			155 × 227	
版１－11	なし			155 × 226	
版１－12	なし			156 × 227	
版２－９	なし			74 × 40	・賀正　昭和丙午
版３－２	なし			290 × 399	
版３－12	なし			118 × 173	
版３－13	なし			115 × 170	・版３－12 関連
版３－13	なし			115 × 170	・版３－12 関連
版３－14	なし			115 × 171	・版３－12 関連
版３－14	なし			115 × 171	・版３－12 関連
版３－15	なし			116 × 172	・版３－12 関連
版３－15	なし			116 × 172	・版３－12 関連
版３－26	なし			234 × 330	
版３－27	なし			330 × 235	
版３－28	なし			232 × 332	
版３－34	なし				

＊本表は 2012 年 2 月末の版木整理状況である。
＊ Cat. No. は『石井鶴三版画集』（形象社、1979 年）の図録番号。
＊作品タイトルは、『石井鶴三版画集』（形象社、1979）に拠った。

表２：石井鶴三版画作品・寄稿文一覧

雑誌タイトル	巻・号	発行年月日	作品タイトル	備考
平坦	第１号	明治 38（1905）年９月 12 日	猫（英国版画、ニコルソン画）	多色木版（石井鶴三模写、久保井市太郎刻）
	第３号	明治 38（1905）年 11 月 25 日	虎	２色木版
	第４号	明治 39（1906）年１月 14 日	えりもの	多色木版
	第５号	明治 39（1906）年４月 20 日	見る人聞く人	木版
方寸	第１巻２号	明治 40（1907）年６月 15 日	狂人	彫刻　図版
	第２巻１号	明治 41（1908）年１月 13 日	田舎道	ジンク版
	第５巻３号	明治 44（1911）年７月 10 日	無題	彫刻作品
版画（小泉編）	第１巻３号	大正 11（1922）年４月 20 日	湖上	
詩と版画（旭編）	第１輯	大正 11（1922）年９月１日	鹽原多助の絵本をみつつ	
	第２輯	大正 12（1923）年３月１日	子供	多色木版
	第８輯	大正 13（1924）年 11 月 25 日	山	単色木版
	第９輯	大正 14（1925）年１月１日	浴女	木版
HANGA	第２輯	大正 13（1924）年５月 20 日	裸婦浴後	多色木版
版画 CLUB	第１年第１号	昭和４（1929）年４月 15 日	蛇	木版
	第１年第３号	昭和４（1929）年５月 21 日	「春陽会の版画」	
			痩せ猫	
	第２年第１号	昭和５（1930）年１月１日	[賀状]	木版
			「帝展の版画と卓上社展を見て」	
	第２年第２号	昭和５（1930）年２月 10 日	仔馬（Cat. No.63《午》）	
			「創作版画の隆盛に際しての警戒」	
	第３年第３号	昭和５（1930）年 10 月 10 日	羊歯	木版
白と黒 [第一次]	第 20 号	昭和７（1932）年１月１日	猫	
	第 21 号	昭和７（1932）年２月１日	鷲　（Cat. No.62　《厳頭海波》）	単色木版
きつつき	第３号	昭和６（1931）６月 28 日	無題　（Cat. No.61《みみずく》）	単色木版
版芸術	創刊第１号	昭和７（1932）年４月１日	素人相撲	木版
	第２号	昭和７（1932）年５月１日	雛芥子　（Cat. No.48　《ひなげし》）	木版
	第９号（1 年９号）	昭和７（1932）年 12 月１日	賀状（Cat. No.5　《午》）	木版
	第 10 号（第２年正月号）	昭和８（1933）年１月１日	年賀状二題　蛇、鷲　（蛇：Cat. No.60《巳》、鷲：Cat. No.62　《厳頭海波》）	木版
	第 [21] 号（第２年 12 月号	昭和８（1933）年 12 月１日	年賀状二題　蛇、鷲　（蛇：Cat. No.60《巳》、鷲：Cat. No.62　《厳頭海波》）	木版
エッチング	第 22 号	昭和９（1934）年７月 15 日	石井鶴三挿絵集	
日本版画協会々報	第１号	昭和８（1933）年３月	雪　[図版]	自画石版・作者言
	第５号	昭和 10（1935）年 11 月	「オリムピック芸術競技に就いて」	
	第 26 号	昭和 13（1938）年５月３日	虎　[図版]	木版
	第 32 号	昭和 14（1939）年 12 月 10 日	「文展版画所見」	
	第 33 号	昭和 15（1940）年３月３日	「第８会展感」	
飛白	第１巻２号	昭和９（1934）年９月 10 日	「大東京十二景の完成を見て」[感想]	

＊本表作成にあたって、加治幸子編著『捜索版画誌の系譜　総目次及び作品図版　1905 － 1944』（中央公論美術出版、2008 年）を参照した。
＊本表中の　Cat. No. は『石井鶴三版画集』（形象社、1979 年）図録番号。

※版木、版画の画像については http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/ を参照のこと